

研究分野のキーワード：批判的リテラシー、幼児期リテラシー、教育方法、カリキュラム、授業

研究紹介

高校生の皆さんには、「学力」ということばはなじみがあっても、「リテラシー」ということばは学校生活の中でほとんど使う機会がないのではないかと思います。しかし、「リテラシー」こそ、私たちが一市民として生活を送っていく上での不可欠な力を意味する概念であり、学校教育を通して子どもたちに保障していかなければならないものなのです。

「リテラシー」とは、ことばを媒介としながら他者と交わり、社会に参加し、自己を省察する営みを指します。私は、このリテラシーを学校教育で形成していくためにどのような教育内容や教材が必要か、あるいは教師はどのように教室で授業をつくっていくか、という問題に研究の関心があります。特に、アメリカやオーストラリアで盛んに取り組まれている「批判的リテラシー教育」に関心を寄せ、その理論や教育実践が日本の教育の中でどのような意義を持っているか、どのようにしたら日本でも実践可能かを考えています。

こうした研究テーマを考え続けてきたのは、学校教育における学びを個人が頭の中に知識を蓄積していく営みとしてではなく、個々の子どもが自分にとって学んでいる対象や内容が何を意味するのかを考え、社会に関与していく営みとしてとらえているからです。学校で学ぶのは、受験をはじめとした学力の序列をつけるためではなく、平等や社会的公正の追求という観点から、もっと突き詰めていけば人や社会を幸せにし、豊かにするためのものであると考えているからです。これを実現していくためのキー・コンセプトが「リテラシー」なのです。

たとえば、識字率（辞書的には literacy の訳）といわれるものがあります。その社会で基本となる読み書き能力がどのくらい普及しているかという指標です。識字率というと、おそらく多くの人がいわゆる開発途上国における不十分な教育環境を思い浮かべるのではないのでしょうか。確かにこれらの国々における子どもたちの教育を受ける権利の問題は、きわめて深刻な問題です。しかし他方で、高い識字率を達成しているとされる日本の子ども（あるいは大人も含めて）は、幸せに他者と関係をつくったり、社会に希望を描きながら参加したりできていると言いきれるのでしょうか？ 残念ながら、経験的にもさらには種々の調査データからもそれとは反対の現状があります。このように見ると日本の子どもたちは、識字率は高くても「リテラシー」の水準は十分なレベルとは言えないのです。

ことばは、記号の体系である以前に経験の総体です。人は、自己の経験や置かれている文脈からことばの意味を構築し、ことばを通して他者や社会と関わっています。私たちが生きていく上で必要となることばは、現実味があり (real)、他者や世界と応答的で (responsive)、自己省察的 (reflective) な営みとして形成されなければならないのです。これを学校の授業づくりとして考えていきたいと思っています。